

若林つやと小林多喜二

——貴司山治聞き書き資料から

伊藤 純

「若林つや」といっても、それほど広く知られた名前ではない。明治三十八年、伊豆の片田舎に生まれ、地元の教員養成所や静岡の女子師範で学び、伊豆半島のあちこちの小学校で教員として働く。しかし、「時代」というものに生真面目な感性をもっていた彼女は、その時代の波浪に感応せずにはいらなかった。大正後半から昭和……人々の命運に深い刻印を残さずにはおかなかった波浪の時代を、若林つやは「意固地に」生き抜いた。貴司山治資料の中に、小さな、しかし目をそらし難いその痕跡が残されている。



図1) 代表的な若林つやのポートレート、貴司に送付されてきた時の添え書きでは『写真屋がとりましたのですこしこしらえがあるようです』とある。

一・「大正」という時代の風

大正時代というのは、明治と昭和に挟まれた十五年間という短い期間に過ぎない。しかし「時代閉塞」と石川啄木に喝破されたような絶対主義的色彩の強い「明治」と、東アジアに出兵し米国と戦い亡国に至る軍国主義の「昭和前期」という、いずれもあまり芳しくない印象を持つ二つの時代に挟まれながら、この時代は希有といつていい独特の色彩をもった時代だったことに注目しなければならない。

経済的には、ことに、第一次大戦に本格的には加わらずに莫大な戦時利得にあずかった（元老井上馨はこれを「天佑」といった）——もちろん、歴史はそれほど単純ではなく、第一次大戦の利得は、明治以来の近代化、日本資本主義が五十年という経過の中で漸く原始的蓄積をおえて機能し始めたという基本的な流れの上の出来事だったろうけれど、ともかく、現今我々が「近代的」とか「モダン」とか感じるような多くの文化が、大正時代に生み出されたものだということは、まず記憶されなければなるまい。

近代的産業の発達によって、多数の低賃金の労働者とともに、中産階級といわれる階層も形成される。

そのような中で、貧困と社会的不平等の問題は、むしろ、中産階級、知識階級によって

「社会問題」として認知され始める。実は、貧困や不平等の問題は明治早期、自由民権運動やその精神を継ぐ幸徳秋水などの社会主義への関心の中で鋭く論じられてきたが、少なくとも大正中期までは、貧困問題の根本的解決を唱える「社会主義」は夢物語であった。ところが、一九一七年（大正六年）十月のロシア革命によって実際に社会主義国家が作られ夢物語が忽然と現実のものになった——つまり「社会主義」というシステムによって貧困と不平等が解決できるかもしれない、という考え方が、現実に政治的、あるいは人生的選択肢になり得るというイメージを現前させた。これは、往事の人々に計り知れぬ衝撃を与えたと考えられる。

当時二十歳前後だった日本中の若者が、大なり小なり深い影響をうけた有様は、いろいろな記録や記述からうかがえる。政治的選択肢とまではいなくても、少なくとも思想的、論理的、ないし倫理的選択肢として「社会主義」というものを考慮しないわけにはいかなという状況が出現した。

われわれは、「社会主義」という選択肢が再び夢物語となった「ベルリンの壁崩壊」以降の世界に生きている。むしろ、大正中期～昭和初期に生きた若者のほうが「社会主義」の現実性についてはるかに切迫した態度決定を迫られていたのではないか。そういう「時代の風」が、日本列島の隅々にまで吹いていたと考えなければならぬ。

二・「若林つや」の登場

昭和三年、伊豆の伊東で小学校教員をしていた文学少女「杉山みつえ」は「若林つや」に出会う。

実はこの時、物書きの「若林つや」はまだ存在せず、教員である「杉山みつえ」がいただけである。その「みつえ」が、実在の「若林つや」に出会うのだ。その印象的な情景を、「若林つや」の評伝「白き薔薇よ」で堀江朋子氏は次のように描き出す。

……身体検査の時だった。教壇の傍に机を出して、女生徒たちの胸に機械的に巻き尺を廻して、胸囲を測っていった。……「若林つやさん」と呼ぶと「はい」という可愛い声とともに、痩せた胸の子がつやの前に立った。背中に手を廻そうと顔を近づけて、はつとした。若林つやというその少女の胸から頸にかけて、京白粉おしろいがべつとりと塗られている。十二歳の子供とは思えないほど色艶を失った肌……この蕾のような乳首は、白粉の毒でこのまましぼんでしまうのではあるまいか。……

昼休み、教室に座っている少女を、若い男の教師が窓から子猫ちゃんと呼んだ。少女のお座敷名だ。つやは教師に食ってかかり、少女を二度とその名前で呼ばないよう誓わせた。……

そして、「杉山みつえ」は、その「若林つや」を自分のペンネームにするのである。

後に紹介する「貴司山治の聞き書き」でも、このペンネームの由来はつや自身によつてつぎのように語られている。

若林つやというのは私の教えていた伊東の小学校の生徒で、伊東の町の舞妓半玉でした。頭のいい可愛らしい子でした。（*消し線は若林による、以下同）

この子のことを短篇にまとめて「女人芸術」に投書したと思います 筆名など考えているひまもなくてそのまま実在の名前を使いましたので私にはふさわしくなかったと思います

この文章は、貴司がインタビューを要約して校閲を求めた原稿紙に、若林自身が加筆修正を加えて返送してきたものである。校閲は神経細かく、貴司が「舞妓」と書いたところを消して「半玉」と直している。昨今では舞妓も半玉も、芸者見習いという意味でいいかげんに混同されているが、舞妓は本来、京都祇園を中心に厳しいしきたりの下で育成されている芸妓見習いであり、関東でいわれる半玉と同義ではない。おそらく若林は、そういう言葉遣いのラフさを見過ごせなかったのではないだろうか。

また、『女人芸術』に投書したというのは、最初の掲載作品である同誌二巻十二号の「光を感じる子」のことであろう。この作品では、半玉ではなく体操着が買えず教師に叱責され体操の授業からはじき出される貧農の娘が主人公になっており、無神経でヒステリックな教師が批判的に描かれている。

モデルの実名を自分のペンネームにしてしまったことについて「私にはふさわしくない」といつている意味ははっきりしないが、「若林つや」というなんとなく「艶っぽい」ペンネームが、教師であり堅物の自分にはふさわしくない、という含意であろうか。それに、筆名など考える暇がなく便宜的にその子の名前を借用してしまった、という言い分も何か弁解がましい。

おそらく、教え子の中でもとりわけ愛おしく哀れなその幼な子の名前を、わが名としないではいられない気持ちがあったのではないか。弱者に寄り添わずにはいられないという、若林つやの原像がそこに潜んでいるように思われてならない。



図2) 若い頃のポートレート、送付された写真の中の一枚。

三．『女人芸術』からの出発

雑誌『女人芸術』によって若林つやは、物書きのスタートをきった。

『女人芸術』は、長谷川時雨という一種の「女傑プロデューサー」が、女性の社会的地位拡張の場を構築しようという気概で、大衆文学で売れっ子になった夫・三上於菟吉の稼ぎ出す印税の「有効利用」として発刊した「女性の、女性による、女性のための」雑誌である。初期には徳島県人の生田花世が中心的に働いており、

「時雨の文壇での華やかさはもちろん、三上の経済力、および花世の奔走が『女人芸術』発刊に力あつたことは強調されなくてはならないだろう。」

② 尾形明子「女人芸術の世界——長谷川時雨とその周辺」ドメス出版1980/10/15
発行33頁。

と、生田花世の存在が三本柱の一つであったことを研究者尾形明子氏は評価している。そしてこの雑誌は

「……いま全世界で、この日本の女性ほど健かにめざましい生育をとげつゝあるものがあるか？ 初夏のあした、ぼっぱいと潮が押しあげてくるやうに、おさへきれない若々しい力をためさうとしてゐる同性のうめきをきくと、なみだぐましい湧躍を感じないではいられない……」

③ 昭和三年七月『女人芸術』創刊号編集後記。

という長谷川時雨の最大限のアジェーションにみられるように、女性解放一般をイデオロギーをこえて希求するジャーナルとして世に出た。目次を見ても、文芸誌でもイデオロギー誌でもなく、幅の広い総合誌、啓蒙誌を目指していることがわかる。

因みに、この同じ創刊号の編集後記で生田花世は

「女子文壇、青鞥、ピアトリス、処女地、女人芸術。再び若き心は還り、この女人芸術によって十分思ひ存分ものが云えることだ」

と書き、『女子文壇』（明治三十八年から大正二年まで五十四巻を出した『青鞥』の前身とも評価される雑誌）以来のつながりを強調している。

しかしこの『女人芸術』も、数年を出でずして急速に「左傾」していく。その経過の詳細は前掲尾形明子氏の著書に詳しく述べられている。長谷川時雨という人のプロデューサーとしての幅の広さ、太っ腹なところも要因といえそうだが、やはり第一節でふれた、大正後半から昭和初期の大きな時代の風、というものを考えないわけにはいかない。貧困と不平等、そこから生じてくる目の前にある悲惨と悪徳、そういう問題に対する人間として、知識人としての態度決定が、「社会主義」という選択肢を抜きにしては考えられない——そういうある切迫した倫理観・時代の風圧をみななければいけない。

実は、第一次大戦の利得によって日本は一時のバブルと昂揚を経験したけれど、すぐその後からいわゆる戦後不況、関東大震災による首都の壊滅、金融恐慌、世界恐慌と、次々

に深刻な混乱に直面するのである。社会主義の国際的戦略本部コミンテルンは、一九二〇年代後半から一九三〇年代に至る世界を覆った恐慌、資本主義経済の混乱をとらえて、資本主義第三期説を打ち出す。つまり、このような世界恐慌は資本主義の矛盾の究極の表れであり、その全面的崩壊は間近い——資本主義は今や終末期・第三期だ、という。そこで知識人の中にはその終末にいたる時間を数年、ないし十数年、と真顔で考えた人々も少なくなかったようである。

貴司の聞き書きでも——

「女人芸術」に何度か書いている内、昭和六年に日本プロレタリア作家同盟に加入しました。その加入のいきさつは——

という貴司の問いに対して、つやは、断固として——

あの当時は特別の人でないかぎりすべての人がそういう勉強をし、そうしなければならぬような時代だったでしょう。直接紹介し進めてくれたのは宮本百合子さんと湯浅芳子さんだったと思います

と答えている。

もちろん他方では、そういう「希望的梦想」をしたたかに一笑に付した人もいた。林芙美子の「放浪記」は、左傾していく『女人芸術』に長く連載された作品だが、その作者の林芙美子は『女人芸術』誌上で——

……いったい革命とは、どこを吹いてゐる風なんだ——中々うまい言葉を沢山知っている。日本のインテリゲンチヤ、日本の社会主義者は、お伽噺を空想しているのか！

④ 林芙美子「目標を消す」女人芸術社『女人芸術』二卷十二号 1929/12/1 101頁。

と毒づいている。まさにこのあたりにこそ『女人芸術』の幅の広さがあったというべきかもしれない。

いずれにせよ、時代の風の中で社会主義に大きな関心を寄せていく『女人芸術』に、若林つやは文章生活の最初の門戸を開くのである。

四・多喜二遺骸の枕頭の三人の女

貴司の聞き書きに対する回答で、若林つやは、自己の閲歴を生真面目に答えている。ここからは、その聞き書きそのものをたどっていくことにしよう。

貴司は昭和四十年八月二十一日、若林つやの勤務先である民族学博物館をおとずれ、その関歴の概略や、小林多喜二との関係を聞いている。



図3) 西東京市にジオラマで復元された、今は無き「民族学博物館」の姿。

民族学博物館は現在の西東京市保谷に、昭和十四年から昭和三十七年まで存在した、渋沢敬三が創立した博物館。民族学振興会の事務所でもあり閉館後も建物は平成十一年まで維持されたが、現在は何もない。収蔵品は大阪の国立民族学博物館に継承されたという。

若林つやはここに、昭和十九年から閉館後の昭和六十二年まで四十三年間勤務した。

最近この博物館の存在を郷土史として見直そうという気運がおこり、二〇一三年ジオラマで復元され西東京市の西原総合教育施設に保存展示されている。

なぜ貴司がこの時期にこのような取材調査を思い立ったのか、それには若干の前史がある。

昭和八年二月二十日、小林多喜二が築地警察署で拷問虐殺された、その凄惨な実態や、執拗な妨害下での通夜や葬儀の模様などは、江口渙、窪川（佐多）稲子、貴司山治、などによってその直後から禁圧をかくぐって様々に報じられ描き出されている。その一つである窪川稲子の「報告文学」と副題された「二月二十日のあと」には、遺骸の枕頭に駆けつけて泣く三人の美女（窪川自身は「美女」とは書いていないが、美女と記載する理由は後述）の姿を描いている。

……親戚の婦人が三人転がるやうに走り込んできて小林のそばに泣き伏した時、お母さんは顔を上げ小林の屍の上に目を落してはつきりと言った。

「×されたのですよ。多喜二は。」
その言葉で、三人の婦人が一層声高く泣いた。

⑤ 佐多稲子「二月二十日のあと」 日本プロレタリア作家同盟『プロレタリア文学』昭和八年四・五月合併号、1933/1発行、56頁。

この三人は一体誰だったのか。

戦後、多喜二虐殺の状況を、関係者の記憶がある内に記録確認しておこうという目的で、一九四九年三月六日、中野重治宅（中野自身は講演旅行で留守だったが）で関係者十五人が集まり、一日がかりで座談会が行われた。『新日本文学』に掲載されたその記録によると――

⑥ 「小林多喜二の死とその前後・座談会・一九四九年三月六日」 新日本文学一九五〇年二月号 195021発行 31頁。
出席者 小林セキ（多喜二母）、小林三吾（多喜二弟）、岡本唐貴、江口渙、立野信之、笹本寅、藏原惟人、手塚英孝、佐々木孝丸、青柳盛雄、原泉子、徳永直、間宮茂輔、壺井栄、（司会）貴司山治。

江口（*江口渙・伊藤注・以下同）そこで（*遺体が阿佐ヶ谷の小林宅に運び込まれた頃）例のタキ子さん（*田口タキ、多喜二が小樽時代から最も親しかった女性）が来たんじゃないか、……妹さんともう一人の女の人と三人で来ていたようだった。三人とも美人だったよ。小林の右手の枕許にずらりと一列に坐っていた……。

……僕の記憶は確かなんだ。三人が玄関からすつと這入って来たんだよ。妹さんは藤色の羽織を着ていたし、タキちゃんも黒い羽織をきていた。もう一人の女はぼたん色の羽織だった。タキちゃんがいつとう枕もとに近く座って、おじぎをしたと思うと、三人が一斉にワーツと声をあげて泣いた。気の毒な位泣いた。黒と藤色とぼたん色の三つの羽織姿が一せいに曲線をえがいて前につつぶしたのが、今でもはつきり目に残っている。

と、窪川稲子の「二月二十日のあと」の描写とほぼ付合する状況を江口渙が語っている。それどころか、美女にとりわけ関心の高い江口の証言によって、女性が美しかったことや、三人の女性の羽織の色までが特定できるのである。ただそれでも、美女の内二人が田口タキと多喜二の妹幸であることはわかるが、ぼたん色の羽織の女が誰だったのかはわからない。

そこでいろいろ揣摩憶測しほがなされたようである。三人目の女は、当時多喜二との仲を取りざたされた「若林つや」ではないか、という憶測である。だいぶ時期は下るが一九七六年二月二十七日号の『週刊朝日』に平野謙が、貴司などがそのような推測を語っていたという形で書いている。貴司周辺資料で文字として見たことはないが、確かに、噂好きの貴司がある時期そのような憶測を誰かに語ったこともあったかもしれない。

そのような前提があつて、貴司はその疑問に決着をつけようとしたように思われる。昭和四十年八月二十四日付の、つやから貴司への手紙がある。貴司は八月二十一日のインタビュー取材のさいに、つや自身のポートレートポートレートの借用を依頼したらしい。それを送ってきたもので、その添え書きに――

この間は失礼しました
意外なことでおどろきました

故人のめいよのために 私が生きている間に
おめにかかり事実をお話出来たのは幸でした
写真をお送りいたします

八月二十四日

杉山美都枝

貴司山治様

とある。「意外なことでおどろきました」とは、おそらく、つやが小林多喜二と何らかの関係があったのではないかという、後年平野謙がいうところの「げすのかんぐり」に類する噂の確認、というインタビューの主題についてのことではなからうか。貴司は、若林つやと多喜二の関係を主題としてインタビューを申し入れたのではないか、ということが想像できる。



図4) 依頼によって三枚の写真が送られてきている。図1、2とこの写真である。年齢的雰囲気と、木の窓枠などの背景から民族学博物館時代、つまりインタビューが行われた頃のものではないかと思われる。

五. 「若林つや・聞き取り」資料

若林つやは、そういうアクセスなインタビューに対して、細かくまともにこたえている。ただ、この聞き取り調査は速記や録音を取ったわけではないので、貴司が直後に、記憶にもとづいて要点を書き出し、それを若林つやに送付して校閲確認をもとめる、ということかたちで資料として残された。

貴司の「聞き取り要点」はインタビューの行われた八月二十一日と推定される日から旬日を出でず送られたと考えられる。約一ヶ月後の九月二十一日付速達で、細かく加除修正を書き込んだ原稿紙が、貴司に返送されている。

その現物は現在、徳島県立文学書道館に収蔵されているが、貴司が書いた聞き取り要点にたいして、若林つやが細かく加筆修正を加えていることが分かる。

(図5) 「若林つやによって書き込み訂正された聞き取り原稿一枚目」

八月二十一日 民族博物館での
 庫取要録

△私の生れたのは伊豆の下狩野村
 (今修善寺町に編入)で、家は中
 農家、五人息子とうかいの長子
 です。静岡縣立女子師範を出て、
 伊豆市で三年間小学校の先生
 ました。

「女芸術は同人雑誌に
 まして「同人」誌とい
 のはありやないか」

頭のい、かみこいし、
 子じい

△教員時代、^{小説}を書くと志
 し、^{上流な}雨のハチ代さんの「女人芸術」
 の月人にまじりました。実名で書
 いては教員の方にむづいので若林
 つやと、いう筆名を用いました。

△若林つやといふのは私の教えで
 いた伊東の小学校の生徒で、伊東
 の町の舞妓でいた。かまき喜喜女
 女で、私 彼女 はこのや女の生涯に
 種々の興味をもち、詩を書いた
 小説に書くことも、今でも思っています。

伊東の小学校の生徒で、伊東の町の舞妓でいた。かまき喜喜女女で、私 彼女 はこのや女の生涯に種々の興味をもち、詩を書いた小説に書くことも、今でも思っています。

以下、その原稿の書き起こし全文を示す。貴司の提示稿にたいする若林の加筆修正を太字で示す。消し線も若林によるものである。

八月二十一日民族博物館での聞取要点

*「？」に「？」添え字あり

△私の生まれたのは伊豆の下狩野村（今修善寺町に編入）で、家は中農家、五人きょうだいの長女（中略）です。静岡県立女子師範学校二部を出て、伊東市で二年間小学校教員をしました、

△教員時代、（中略）小説を書くことを志し、（中略）長谷川時雨さんの「女人芸術」の（中略）の読者であり、投書者（？）でもありました。実名で書いては教職の方にひびくので若林つやという筆名を用いました

（欄外書込み）「女人芸術」は同人雑誌ではなく従って「同人」というものはありませんでした

小学校の先生が小説をかくなど、しかも左がかった「女人芸術」を讀んでいることすら大へんなことでした。

△若林つやというのは私の教えていた伊東の小学校の生徒で、伊東の町の舞妓「半玉」でした。頭のいい可愛らしい子でした。

（欄外書込み）この子のことを短篇にまとめて「女人芸術」に投書したと思います 筆名など考えているひまもなくそのまま実在の名前を使いましたので私にはふさわしくなかったと思っています

△「女人芸術」に何度か書いている内、昭和六年に日本プロレタリア作家同盟に加入しました。

その加入のいきさつは――
あの当時は特別の人でないかぎりすべての人がそういう勉強をし、そうしなければならぬような時代だったでしょう。直接紹介し進めてくれたのは宮本百合子さんと湯浅芳子さんだっと思えます

△加入して間もなく、書記長の小林多喜二氏から、「多喜二書翰集」に収めたような手紙 がきたのです。

⑦ 小林多喜二から若林つやに送られた「書翰集」に収めた第一の手紙とは、一九三二年一月の約八〇〇字の手紙である。その要点は

「この間の常任委員会（*作家同盟の）で、新しく同盟員になった人々の作品指導を、個人的に試みてはどうかという事が問題になり、さしあたり僕はあなた

と阿蘇弘君の二人を受けもつことになりましたので、この手紙をかく次第です。
……婦人作家の作品は——これは同盟に限らないのですが——とにかくエピソード的な短いものが多いのは遺憾です。もっと積極的な主題とがっちり組んで、あなたには長い、いゝものを書いてもらいたいです。……手紙よりもおめにかゝってお話しした方がよいと思いますから、一度僕の家へお出下さい。……」(新日本出版社1983/30発行 小林多喜二全集第七巻58頁)

第二の手紙が同年三月上旬に送られており、全集に収録されているのはその二つだけである。なお、故人のめいよのために申し添えれば、美人のつやだけでなく、常任委員会で指導担当となった十六歳の少年工阿蘇弘にたいしても、多喜二は懇切な手紙を四通以上送っている。

私は今日までそれを書いてあるとおりに信じ、**同盟事務所**をはじめ、とすればこれは二番目になりますが馬橋の氏の家へ訪ねて行きました。最初のその訪問では、小林氏から、大体つぎのようなことを話されたと思います。

ごく初歩的な指導だったと思います。まず「志賀直哉」をたんねんによむようにと言はれ、私の書いた小説についてくわしい批評をしてくれたと思います。阿佐ヶ谷の何とかいう文士などのよくいく小さな喫茶店でした

△一番はじめは、下落合の同盟事務所であったと思います。その時の話しは「書翰集」に収めた第一の手紙をもらった直ぐあとだったと思います。会合のあとのほんのちよつとした時間でした。いつでも来るようにと言はれ、煙草の箱にもう一度地図をかい渡してくれました。

△~~二番目~~三番目は「新宿の不二屋」でした。やはり私の小説について細々と何か言ってくれました。

短歌や俳句の場合は一字一句が左右するが、小説の場合でもこんなに細かく批評や注意をもらえるのは有難いと思ったことをおぼえています。他には、基本的な勉強になるものをあれこれと読むようにと言はれました。その時は三時間ぐらいはじめから終りまで文学の話でした。

△~~四度目~~四度目(同盟事務所で会ったものを加えると四度目になります)にあったのが、最後でした。その場所は、六本木の通りでした

喫茶店にちよつと入ってすぐ出て、どこかよくわからないのですが、麻布のどこか二業地か三業地のようなところを歩きながら話し、今考えると「二の橋」から私は電車に乗りました。「五・一五」の号外が電柱に貼ってあるのをみて「やっだな」と言はれたのでその日をおぼえています

で、時は昭和七年五月一五~~日~~だったと思います、

いそがしくなるし、生活が変わる(もぐる)から、もう面倒をみてあげられないから、というようにいわれたのをおぼえています。小説がかけたら立野信之

氏にみてもらうようにといわれました。

その時の時間は極く短く、話の内容は他のことは一切話さず、私もきくべきではないと思っていましたので何もききませんでした。電柱のかげに立って私の電車に乗るのを見ていたことを記憶しています。

△私は小林氏には、何も特別な気持ちはもちませんでした。女子学生が尊敬する教授の講義をきくような調子で、きまじめに、話をきいたのにまちがいありません。何も特別なそぶりも感じませんでした。

△昭和七年五月ごろから、小林氏は地下生活に移ってしまい、私は元來体が弱くその年の秋ごろに病気をして（肺結核）伊豆にかえて一年間、養生をしていますが、ので、どんな関係もなくなってしまうたわけです。

小林氏の死のことは郷里で新聞によって知りました。

△昭和八年の末頃、体がよくなったので又東京に出、長谷川時雨さんが「女人芸術」のあとを「輝ク会」という婦人の文化団体をつくっていらっしゃいましたのでその方の仕事を丁度十年間時雨先生の亡くなるまでしました。貴司さんの「文学案内」や亀井勝一郎氏や藤原定氏等に進められて「現実」などに短篇を書きましたが、時代の悪化する中で文章も遠ざかやてしまい、ちがった方向に行きましたので、だんだんと昔の人たちとも遠ざかって行き、現在の所にとめてもう二十年間、今日に至っています。

書くことがむづかしくなり、かけなくはなっています。けれども文学から全く遠くってしまえないのでこまっています。

（翻刻以上）

六・あらかじめ失われた恋人たち

⑧ リルケの詩の題名、また清水邦夫、田原総一朗共同脚本・監督、一九七一年制作の映画の題名にも使われている。

この「聞取要点」を見ると、若林つやは貴司の取材に対して、極めてまともに生真面目に答えていることが分かる。前に触れた「舞妓」を「半玉」と訂正するようなこだわりもそうだが、小林多喜二とあった回数をこまかく確認し、それは四回であり、三回でも五回でもないと意地になって主張しているようにさえ見える。それはおそらく、多喜二と何か関係があったのではないかという男どもの「げすのかんぐり」に対する事実にもとづく反論、何もあやしい逢い方などしていないという主張であるように見える。

では、実際につやと小林多喜二の出会い「要点」で彼女が陳述しているように「女子学生が尊敬する教授の講義をきくような」ものだったのかといえば、必ずしもそうばかりとはいえない。

昭和九年、小林多喜二が警察によって拷問虐殺されるという事態から一年あまりしかたっていない早い時期に、彼女はこんなことを書いています。

その後愛情からよりも、むしろ仕事の上でこの人ならばと思った人は私自身の病氣帰省中に、ふいな死方をしてしまいました。私はこんなふうに中途半端な、不幸な、ことばかりして来たせいか今では軽はずみに、恋愛などしたくないと思っています。……でもその人の仕事、研究、感情等でほんたうに崇拜出来、一緒にやっけて行けるんだったら、自分の凡てを、その人のために投げ出してしまってもよいと考へてゐます。……

⑨ 若林つや「私の恋愛は？——淡々水の如きものを」 文化集団社『文化集団』二巻 七号 19347発行。

この文章には一種ややこしい自己撞着があつて分かりにくい。あえて、解釈すれば……「病氣帰省中にふいな死方をしてしま」った人、というのは紛う方無く小林多喜二を指すところだが、その人への思いは愛情ではなく仕事の上、つまり文学の師匠としての愛着だとして一線を引いている。でもそれは中途半端な煮え切らない態度だったのだ。……これからは、仕事、研究、感情などで受容できる人がいたら、凡てを投げ出して愛にまみれてしまおう……

複雑なレトリックだが、でもこれは、明らかに今は亡き小林多喜二への愛の告白である。

それともう一つ、そういう「想い」の世界を越えた現実世界でつやと多喜二を結びつけるような事柄が生起していた。

つやの評伝「白き薔薇よ」のなかにつきのような一文がある。

多喜二はつやを妻にしたい、とある人に打ち明けた。しかし、その多喜二の気持ちを聞いた党幹部が、あの女では拷問に耐えられそうにない、すぐ転ぶ、と反対したという。

これは、私がつやの口から直接聞いた話である。……

⑩ 堀江朋子「白き薔薇よ」図書新聞2003/6/30発行 73頁。

「白き薔薇よ」の筆者堀江朋子氏は、プロレタリア詩人上野壯夫のご息女であり、しか

も、若林つやの晩年、十年近く民族学博物館（民族学振興会）でつやの下に勤務された方であり、その書かれていることは重くみなければいけない。

しかしそれにしても、このことを若林つやはいつ、誰から聞き知ったのだろうか。阿部浪子氏の「書くこと恋すること」^⑩では、貴司が取材に訪れた時に戦前の話しとしてしゃべった、そしてそれはつやにとっては初めて聞く寝耳に水の話しだった、ととれるような記載がある。つやが、阿部氏の取材に対してそういう思い出話をしたのかもしれない。だとすると、先に引用したつやから貴司への写真送付の添え書き「意外なことでおどろきました」の「意外」は、この事実に対して述べた言葉かもしれない。

^⑩ 堀江朋子「白き薔薇よ」図書新聞2003/6/30発行 73頁。

貴司に関していえば、つやと多喜二に関わりが生じていた一九三二〜二年頃といえれば作家同盟の主要な活動家の一人であり、しかも非党員のシンパサイザーという比較的自由な立場にあった。大衆作家としてゴシップ好きの「地獄耳」だったから「誰と誰がどうした」といった種類の噂話は洩れなくキャッチしていたと思われる。後年、もう時効と違ってつや本人に物語った可能性は十分考えられる。

いずれにしろ、こう見てくると、若林つやの、貴司の聞き取りに対する答えは、大筋ではその通りだが、やや綺麗事に過ぎるとい感じもする。形の上では「女子学生が尊敬する教授の講義をきくような」ものだったかもしれないが、内実は、双方に一時、古い言葉でいえば「憎からぬ」気持ちがあったこともあった、と考えるのが自然であろう。

そう思ってみ返すと、「聞取要点」の一節、昭和七年五月十五日（――つやは貴司の聞書要点の「ごろ」ということばをわざわざ消して、電柱に五・一五事件のビラが貼ってあったという記憶に基づいて、この別離の日を五月十五日としているが、実際はこの事件は五月十五日夕刻に生起しているから、ビラが張られたのは十六日以降と考えられる）、麻布二の橋から市電に乗って去って行くつやを、五・一五事件のビラの貼られた電柱のかけからそつと多喜二が見送った、それが最後の別れになったという演歌映画の一シーンのような情景が、何か大きな時代のうねりと人間の生きざまとを垣間見るようで、身に沁みるのである。

……しかし、もしこの別れが事実昭和七年五月十五日近辺だったとしたら、多喜二は正にその頃から杉並区馬橋の自宅を出て非合法生活に入り、この麻布二の橋のたもとからほんの百メートルほどの麻布称名寺境内の二階屋に、伊藤ふじ子とともに移り住んでいたのだ。かつて、拷問で転ぶからと否定された女の場所に、すでにその時伊藤ふじ子がいたのである。そしてふじ子は生き抜いた。

一時、多喜二の通夜にあらわれた三人の美女の一人に、伊藤ふじ子が擬せられたこともあった。しかしそれは全くの誤解で、伊藤ふじ子は一人で現れて遺骸との壮絶な別れを演じた末に姿を消した。三人の一人ではなかったことは江口渙や小坂多喜子の記述などから

も明らかである。ふじ子はその後、プロレタリア漫画家の森熊猛と結婚し昭和五十六年七十歳まで生き、「多喜二忌や 麻布二の橋 三の橋」という句を残す。麻布二の橋がそこに忽然と甦る。

現在では、ぼたん色の羽織を着た三人目の女性は、田口タキの小学校時代の同級生岩名雪子だというのが定説となっている。岩名雪子は劇作家で「鶴・岩名雪子戯曲集」という本をのこしているが、そのあとがきに「……タキ夫人は、私の小学校の同級生で、長い年月の苦楽が共感でき、互いに励ましあってきた……^⑩」と、既に別の人生を生きているタキに配慮した極めて暗示的な文言ではあるが、印象的な言葉が記されている。因みに田口タキは百二歳の長寿を全うし、二〇〇九年に死去した。

⑩ 岩名雪子「鶴・岩名雪子戯曲集」1987/5/28発行 603頁。

七．残された「若林つや資料」

若林つやと小林多喜二の物語は昭和七年で終わるが、そのあと、つやは長谷川時雨が『女人芸術』の後継の形で始めた雑誌『輝ク』の編集長のような立場でその終刊まで八年働く。その頃から、芳賀檀はがまゆみとの辛く長い恋も始まる。敗戦間際の昭和十九年からは民族学振興会の勤務が始まりこれは実に四十四年間続くのである。そして、平成十年九月十七日伊豆湯ヶ島の病院で死去する。享年九十二歳。

その後には、段ボール箱いくつもの古い資料が遺された。その主要なものは、編集長として働いた『輝ク』時代のものだが『女人芸術』時代のものも多く含まれている。編集する立場になると、おのずからいろいろな人の原稿や資料が集積してくるものなのである。中には小林多喜二の生原稿も含まれている。それらの資料は約四百点にのぼり、今、北海道文学館に収蔵されている。

なお、前述のように貴司の求めに応じて若林は自身のポートレートを三枚送ってきたが、もう一枚、若林自身とは異なる写真が同封されていた。親友の杉本智恵子のものである。



図6) 同封されていた杉本智恵子のポートレート。

杉本智恵子は、杉本良吉（プロレタリア文化聯盟の幹部で、昭和十三年に映画スター岡田嘉子と樺太から越境駆け落ちし、ソビエトで銃殺された人物）の妻だった。智恵子は夫に捨てられた暫く後に結核で死去した。求められていない杉本の写真を若林がわざわざ同封してきた背後には、薄命な友への愛惜と、理不尽な事態への怒りが秘められていると感ぜられる。

(二〇一四・一) *2015/05改稿